

論
説

メスナー自然法思想の方法の問題

——倫理学の課題と方法——

目次

前書き

第一章 学問としての倫理学の課題

第二章 倫理学における経験的・帰納的方法と演繹的方法

第三章 倫理学における経験科学の意義と限界

第四章 倫理学領域での実験的方法の意義

山
田

秀

前書き

これまで筆者は、ヨハネス・メスナーの自然法思想に関連して様々な観点から、そして様々な論題に即して、^①或いは、その趣旨を酌んでの応用発展的な論稿を公刊して来た。^②ここでは、これまでの論文において部分的に言及されることはあっても主題的に取り上げられなかった論題、即ち、かれの自然法思想の方法の問題を取り上げようと思う。自然法思想は、倫理学と法学の両方の領域を含む。ここではより広い倫理学の観点から、課題と方法を四章に互って論述する。

本論に立ち入るに先立って、若干の註釈が必要である。わたしが目指すのは、あくまでもヨハネス・メスナーの自然法思想に即してその学問方法論を見定めることである。但し、メスナー自然法論の位置づけを最小限確認しなければならぬであろう。自然法論は、人間個人についても人間集団、即ち、社会共同体についても関与する学問である。とくに社会集団、社会組織体にそれに関わるときに「社会倫理学」 Sozialethik, Social Ethics としてそれは登場する。しかも、キリスト教的（カトリックの、或いはプロテスタントの）社会倫理学として登場する社会倫理学の一つとしてメスナー自然法論が存在する。いまカトリック社会倫理学 Katholische Soziallehre（これは通常「カトリック社会論」 Katholische Soziallehre と呼ばれている）に限定して語ると、これには神学的なカトリック社会倫理学と哲学的なカトリック社会倫理学とが存在する。メスナーの自然法論は後者に属する。倫理学は、方法論の問題を取り扱う部門、主にメタ倫理学と称される部門、個人的であれ社会集団的であれ人間の実践生活に

関する具体的な指令当為を取り扱う規範部門に分たれるが、領域的には、基礎倫理学、個人倫理学、社会倫理学と分類され得る。社会倫理学には、主要なものとして古くから国家倫理学（政治倫理学）、家族倫理学、近代以降になると経済倫理学が数えられてきているが、昨今では科学技術の発展の背景の中でもたらされてきた人間の生活水準及び環境の激変に対応しつつ生命倫理学、環境倫理学、経営倫理学、医療倫理学、平和倫理学など新しい倫理学が生成し誕生しつつある^③。

メスナーの自然法思想は、（啓示）神学的な領域の独自性を尊重しつつも自然理性の自立性に立脚する哲学的世俗的な社会倫理学である^④。その思想の重心は応用自然法論に置かれているとしても、メスナーの控えめな表現で「必要な限りで」、基礎理論についての詳密な考察が展開されているので、本稿でそれを取り上げて以下に論じることにしよう。

第一章 学問としての倫理学の課題

第一項 学問の概念

トマス主義における学問の分類に関しては、例えば、ジャック・マリタンの文献が比較的容易に参照され得る。ここではわれわれは、メスナーが学問をどのように把握していたかを、かれ自身の言説によって明らかにしようと思う。

人間の経験には、外的経験と内的経験とがある。そしてこの二種類の経験の区別が、メスナーの学問の概念を規定することになる。ところで、メスナーによると、あらゆる学問は次の共通の課題を有するものである。即ち、学問は、「真理を解明するにあたって、何が経験領域の経験諸事実のそれぞれの根底に、そしてその連関の根底に存するのかを探究」⁵⁾しなければならない。そして、このような共通の課題をそれぞれ有している諸学問が他の学問から区別されるのは、それぞれの学問に固有の問題関心と認識様態による。ここでは人間科学「自然科学方法論に定位した、という意味においてはなく、人間にかなする学問という意味におけるそれである。以下同様。」に限定してことを論じよう。

人間諸科学は、外的経験と形而上学的経験の区別に従って、二分される。すなわち、人間諸科学は、一方では経験的方法にもとづく科学、つまり経験の人間科学と、他方では形而上学的方法にもとづく科学、つまり形而上学的人間科学とに細分されるわけである。

(i) 経験的人間科学は、外的経験 (äußere Erfahrung) によって確認できる人間に関する現実の中にその直接の認識目的を見出す。また、その用いる経験の方法とは、行為様態(行動様式)の事実、原因、相互作用を確定し、人間相互の諸連関の事実に規則を確定する、ということの意味する。これに対して、(ii) 形而上学的人間科学は、なるほど外的経験あるいは内的経験から出発しはするが、それに止まらず、更にこの内的または外的経験のなかに存する所与を、現象学的に取り出して分析を施してゆくことを通じ、超感覚的現実在の本質と根拠の認識を目指し、人間と人間の実存に対して有するこの超感覚的現実在の意義を認識せんと志向するものである。かくして形而上学的人間科学は、人間の本質の問題、人間存在の起源と意味の問題を解明し、これを踏まえうえて更に、次の問い、すなわち、人間の個人的および社会的な生活にかかわる道徳(倫理)秩序が特にどういうものであるのか、という問

いに答えなければならない。⁽⁶⁾ 前者、すなわち経験的人間科学には、医学、実験心理学、社会学、国家学、法学、等が含まれ、後者の形而上学的人間科学には、哲学のさまざまな領域が含まれる。それは、存在論、形而上学、心理学、認識論、論理学、方法論、価値哲学、倫理学、自然法論、社会倫理学、国家倫理学、経済倫理学、文化倫理学である。

さて、ある学問は他の一切の学問から区別されるわけであるが、それは、マリタン流にいうならば、学問の質料的対象と形相的对象によるものであった。これに対して、メスナーは、それを「目的」と「方法」と呼んだのであった。⁽⁷⁾ このようにして、諸学は他の学問領域と区別されるとともに、自己の領域を一方では確保するのである。自己の領域においては、その学問はある意味において主である。しかし、人間によって営まれる学問は、自らの分を弁えずに、すなわち自らに固有の「つまり自己の観点、視角に制約された」認識方法で接近できるのは實在のホンの一部分、一局面に過ぎないのだということを自覚しそこなうことによつて、それを實在の全体と思い誤り、更に自己の正当性まで主張するにいたることが往々にしてあり得る。論理実証主義は、その一つの例に過ぎない。視点を倫理の領域に移してみると、事態はなおさら深刻であるかのようなのである。しかしながら、倫理には倫理に固有な方法があるのであってみれば、倫理に接近するのに相応しくない方法に頼つて倫理に取り組んでみたところで失敗して失望するのは当然の事理である。

「諸学問間の衝突・対立は、常に一方又は他方が、自己の方法論的限界を踏み越えることに究極の理由がある。」⁽⁸⁾ 形而上学的人間科学の認識目的は、人間存在の領域にある。この領域は、人間の「形而上学的経験」の対象であり、「人間精神の自然的形而上学」la métaphysique de l'esprit humain (ベルグソン) の対象である。換言すると、その対象は「先入観に囚われていない人間精神が少なくとも外的實在に關すると同程度の確実さを以て知っ

ている領域⁹⁾である。この先入観に囚われていない人間精神の知るところのもの、すなわち「前学問的（前科学的）認識」（vorwissenschaftliche Einsichten）には次のとき認識が数えられる。人間本性は、感覚的現実によつては把握し尽くすことができない、という認識。良心が人間本性の原事実であること。人間は自己決定を行うことのできる自由な存在であること。人間は絶対的価値の世界に関わっており、それも殊に倫理的世界に参与しつつ生きていること。更に創造者の認識があり、最後に、この創造者に対して自分が責任を負う存在であること、等の認識である。メスナーは、これらの認識を、内的経験事実（innere Erfahrungstatsache）ないし倫理的経験事実（sittliche Erfahrungstatsache）として、かれの主著の一つ『文化倫理学』の冒頭百数十ページに互つてこれを詳述している。その連関で重要なことは、哲学的反省や省察によつてしか探求し得ないような意識事実が問題となっているのではない、ということである。メスナーに言わせれば、形而上学的認識と存在論的認識が学問的、哲学的だけに属すると考えるならば、それは思い違いも甚だしい。形而上学的認識と存在論的認識は、最初から先入観（先入的把握）によつて狭められてしまった思惟「それは実はすでにイデオロギーでしかなくなっている」によるよりも、遙に高い程度で、實在に背を向けない自然的思惟によつて獲得されるのである¹⁰⁾。かくして、われわれは次の問題である倫理学の課題の入り口に到達した訳であるが、この項を結ぶ前に、学問の概念を要約しておこう。

学問は、前にも述べたように、経験的諸事実の連関の根底に何があるか、を探求する人間の知的営為である。メスナーの原文を引いておこう。

「学問的認識は、われわれの意識や観察に提示される事実と事象の根拠と連関の認識である。個別的学問、それゆえに倫理学もまた、ある対象領域の認識の総体であつて、この認識の概念連関と根拠連関が批判的に確保された統一体である。」¹¹⁾

第二項 倫理学の課題

倫理学は、前に述べた人間科学の二種類のうちでは、もちろん形而上学的人間科学に属する。更に、倫理学は、他の形而上学的人間科学から、それが「実践的」学問であることによって、区別される。確かに、論理学、認識論、存在論等は、たといそれが実践あるいは実践的学問たる倫理学に寄与することがあるとしても、そして実際それらの諸学は倫理学にとって不可欠であることは言うまでもないのだが、それ自身としてみれば、やはり「思弁的」学問と呼ばれるに相応しい。これに対して倫理学は、人間の人間の行為をその対象とする学問であるから、紛れもなく「実践学」なのである。⁽¹³⁾

ところで、倫理学も「学(問)」Wissenschaft, scienceである以上、あらゆる学問に要求される責務を果たし、課題に應えることができなくてはならない。その上ではじめて倫理学固有の諸問題にも解決策を提出する資格があるのだから尚更である。メスナーによると、どのような学問体系であっても、それがいやすくも「学問」である限り、そして「学問」を標榜する限り、次の三つの学問の試金石によってその充足性を測られる。すなわち、(i) 経験事実を徹底的に分析しえているか否か、(ii) 論証に論理的首尾一貫性があるか否か、(iii) その体系に内的な矛盾点がないか否か、こうした三つの試金石によって、諸学はその妥当性、充足性を判別されるのである。⁽¹⁴⁾ これら諸要求に應えるために、メスナーの自然法論、これは自然法倫理学と呼ばれるべきものであるが、その自然法論に限らず、すべての倫理学は、主として二つの手続・方法を用いる。「帰納的方法」と「演繹的方法」とがそれぞれである。⁽¹⁵⁾

この二つの方法をどのように結合して用いるかについては、さまざまな可能性がある。しかし、何れにしても、

各々が自己の方法論的な正当化を果たさねばならないことは当然である。より明確に語るならば、「それぞれの方法が、倫理的意識に現われる全経験を徹底的に探究し、解明し、説明するのに役立つように結合されていることが示されなければならない」⁽¹⁶⁾。メスナー自然法論は、その課題を遂行するために、倫理学の対象たる「人間」を全面的に徹底的に理解しようと努める。従ってそれは、確實で、かつ、包括的な経験（事実）から出発するのである。

学問は、自己の探究すべき領域内に見出される経験所与ないし経験事実を取り上げるのであるが、それは経験事実自体に内在する諸連関を明らかにし、その原因・結果の関係を説明するためである。倫理学においても亦然り。われわれは、この問題を別稿で更に詳しく論ずることになるであらう。⁽¹⁷⁾

「あらゆる偉大な倫理学体系が取り組んできた根本問題に三つがある。倫理的なるものの根拠への問い、本質への問い、そして基準への問い、である。いかなる倫理学体系といえども、もしそれが初めの二つの問題を避けて通るならば、必然的に、およそ学問たるものに本質的な要求に応えることなどできはしない。つまり、その学問の対象たる経験所与の基底にある因果連関を探り出すことはできないのである。これに加えて、実践学としての倫理学には、第三の問題が提示される。それは、個人的および社会的生活の秩序原理に関する問いであるが、この問いに答えるためには、倫理学体系は、倫理の基準を指針として提供しなければならない」⁽¹⁸⁾

ここで第三の問いにいう「倫理（的なるもの）の基準」は、それによってわれわれが何が人間や社会にとって倫理的に善であるかを知ることが可能になるような、基準あるいは原理のことであるので、「倫理原理」⁽¹⁹⁾と呼ぶこともできる。倫理学体系に課せられた三つの根本課題については、われわれは「自然法論的認識論——メスナー自然法論の一貢献——」においてより一層詳細に論ずることとなる。

われわれは、更に、学問としての倫理学の課題として、メスナーによって挙げられているものの幾つかをここで

確認しておこう。(i) 倫理的意識事実を把握して、できるだけ正確にそれらを記述すること。⁽²⁰⁾ (ii) 倫理的経験事実の本性、根拠、意味を学問的手法を用いて探求し、更にそれが、個人的・社会的・政治的そして経済的生活に対してどの程度役に立ちうるかを明示すること。⁽²¹⁾ (iii) 倫理法則と人間本性との間に存する相互連関の認識を学問的に獲得すること。⁽²²⁾ (iv) 義務の義務たる所以を説明すること。⁽²³⁾ (v) 倫理的領域においては、自然科学の領域におけるように、計算化することによって認識の確実性を高め、あるいは確保することができない。しかし、この欠陥は、内的経験ないし内的経験事実によって十分に補われ得る。そして、この内的経験が知らしめる直接に明白な原理とその絶対的な妥当性を哲学的省察によって裏付けること、⁽²⁴⁾ などである。第二の問題は、基礎倫理学を踏まえた上でその応用倫理学、あるいは応用自然法論の課題であって、メスナーの『自然法』の「第二巻 社会倫理学」、「第三巻 国家倫理学」、「第四巻 経済倫理学」、更には『文化倫理学』の「第二巻 個人倫理学」、「第三巻 文化倫理学」および『社会問題』が、この課題を具体的に遂行している。本書の目的は、こうした応用倫理学の膨大な領域を徒に駆け巡ることにあるのではなく、基礎倫理学の領域にあることを予め断っておかねばならない。

以上述べ来たつたように、倫理学(体系)には様々な問題が提起されており、その一つ一つを倫理学は解明していかなくてはならない。最後に、あらゆる倫理学(体系)が直面し、乗り越えることを要求される、三つの形而上学的根本問題⁽²⁶⁾が残されている。それは何であるのか。

(i) 経験を分析する際に当該倫理学が根拠としている形而上学的諸原理が、先ず第一に、現実在と経験を探究するのに必要な論理的前提としてしか使用されておらず、第二に、倫理そのものの本質や根本原理を導き出す前提として用いられてはない、という前提を充たすことが求められる。要するに、結論先取りをしてはならない。

(ii) 何れの倫理学体系も、自己の形而上学的公理によって倫理的経験の全領域に接近する方法を提出しうるも

のでなくてはならない。「本質的な経験所与」⁽²⁷⁾を説明せずに素通りするか、それどころか否認せざるを得ないような体系は、誰の目にも明らかのように、決して充足的倫理学ではありえない⁽²⁸⁾。それは、自己批判という学問の課題を果たしていない、ということである。

(iii) もし有効な倫理学であらんと欲するならば、すなわち、もつとも重要な人生問題に目をつぶることなくそれを直視しようとするならば、倫理学体系は、経験の分析から出発しつつも、形而上学的現実在へ上昇していくための確実な道あるいは方途を見出すことができればならない。

以上述べてきたところから、倫理学の根本諸課題にメスナーがどれほど真剣に真正面から取り組もうとしていたか、少なくともその意気込みの程が窺われるであろう。

第二章 倫理学における経験的・帰納的方法と演繹的方法

第一項 帰納的方法と演繹的方法

前項において、倫理学体系が直面する形而上学的試金石として、当該倫理学が立脚している諸原理から論理必然的に倫理そのものの本質や根本原理が導かれてはならないという条件のあることを、われわれは既に見た。すなわち、倫理の本質が、第一原理あるいは幾つかの形而上学的諸原理から実在の認識とは無関係に、演繹的に（狭義の演繹的方法で）説かれるようでは駄目なのである。実際メスナーが行った作業は、これとは全く逆の方法によって

いる。つまり、経験のないし帰納的な方法を用いて、かれは倫理的なるものに探究のメスを入れるのである。

「すべての学問がそうするように、倫理学も又、倫理的真理や倫理的秩序を究明するにあたって、経験から出発して、概念的志向や判断を用いつつ、その目的に到達しようと努めなければならない。その際、思考は主に推論的判断とともに働く。この判断には二様があり得る。経験を分析することを通して直接得られる諸認識にもとづいて下される帰納的判断と、他の方法で直接的に基礎づけられた諸概念（諸認識）にもとづいて下される演繹的判断である。」⁽²⁹⁾

メスナー倫理学は、経験（事実）の徹底的な解明という学問としての一課題を遂行するために、まずは経験からその考察を開始する。そして経験の分析を通じて、倫理の存在根拠、倫理の本質、倫理の基準（倫理原理）の諸問題に接近するのである。われわれは、これを別稿「自然法論的認識論——メスナー自然法論の一貢献——」において既に詳論しておいた。

とは言え、あらゆる学問が帰納的方法（または判断）と演繹的方法（または判断）を用いるように、倫理学もやはり帰納的な方法だけではなく演繹的方法をも用いるのである。⁽³⁰⁾ われわれは既に、倫理学が人間的行為に関わる学問であり、従って実践的学問であることを見たが、このことから実は、倫理学における「演繹的方法」の有する重要な意義が判明することになる。倫理学は、「人間の個人的生活および社会的生活の倫理的秩序に関する学問」⁽³¹⁾である。実践学としての倫理学の方法は、それ故に、一般原理、倫理原理（道徳原理）を「そこにおいて真に人間的なものとしての倫理的生活秩序が実現され得るような情況へ適用（ないし応用）すること」⁽³²⁾である。詰り、倫理原理の具体的妥当性は、情況如何によるわけである。従って、この問題に原理を適用することは当然ながら、推論の手段を含んでいる訳である。これは、同様にあらゆる学問が一般法則を実践的目的に応用する際に用いている方法

であつて、「演繹的手続」に外ならない。この連関で重要な認識事項が一つある。それは、自然科学的・物理学的諸法則は、世界の多様な存在相や諸力に依じて特殊化されているので、個々の法則は極めて限定された領域にしか適用されえないのであるが、倫理の原則はそうではない、という認識である。すなわち、倫理原理は、ごく限られた領域に適用され得るだけでなく、われわれはこれを広範に、具体的に言い換えるならば、個人的領域にも、社会的領域にも、また国家的領域にも、国際的領域にも、経済的領域にも、そして文化的領域にも、要するに、およそ人間関係が問題になるあらゆる領域・場面に適用することができるのである。⁽³³⁾

第二項 経験的・帰納的方法を倫理学の出発点にすえる根拠

メスナーは、かれの大著『文化倫理学』の第四十五章「倫理学の方法論」において、何故にかれが自然法を論ずる際に、また同じことでもあるが、倫理を論ずる際に、新スコラ学やカトリック自然法論に特徴的であると見なされるような演繹的な方法ではなく、経験的・帰納的方法を選んだのか、という理由を挙げている。⁽³⁴⁾

「われわれは、経験的・帰納的方法を採用した。これには釈明が必要である。われわれは、倫理学を論ずるに際して先ず人間の倫理的経験事実から出発した。これに基づいて、倫理的なるものの本質と根拠に肉薄しようと努めたのであった。この方法を概念的・演繹的方法に優先させることが必要だとわれわれに思われたのは、後者の（概念的・演繹的）方法は、哲学的あるいは神学的概念を用いるのであるが、正にこの諸概念に馴染むことが多くの者にとってイデオロギー的ないし心理的な理由から、ことのほか困難になっているからである」⁽³⁵⁾

つまり、メスナーが経験的・帰納的方法を採用するのは、今日の精神的状況によるわけであつて、何も概念的・演繹的方法それ自体が劣っている、という理由に基づくものではない。⁽³⁶⁾ 経験的・帰納的方法を駆使することによつ

て自然法の全貌を明確にしようと努める大きな機縁となつた英国滞在も見逃すことはできないであろう。実際メスナー自身次のように語っている。

「・・・私の長期に亙る英国滞在と英国経験論の思惟様式に精通したことは、徹頭徹尾本書『自然法』——引用者」に活かされている。何故なら、不斷に直接的経験から出発するのであつて、現実的なものとして仮定された諸概念と教説から出発しないのであるから」⁽³⁷⁾

概念的・演繹的方法においては、自己の行為を意識的に目的に向けることのできる理性的存在としての人間行為の終極目的が、始原に置かれている。⁽³⁸⁾そして、この方法は、それ自体としては、決して学問的に支持できないものではない。むしろ、「それは、人間の究極目的への問いと共に提示されている問いであつて、あらゆる人間を動かす、人間存在の根柢と意味への問いなのである」⁽³⁹⁾。

前に述べた現代の精神的情况をいまし説明しておこう。すなわち、概念的・演繹的方法に対して多くの者が接近し難い理由は、あるいはイデオロギー的要因に、あるいは心理的要因にあつた。われわれの時代は、自然科学（的思考）の影響を多大に受けている。また、昨今の教育の傾向も経験に向っている。こうした事情からも、現代における倫理学が、概念的・演繹的方法ではなく、経験的・帰納的方法を採用した方がよさそうな理由が窺えるであらう。

「倫理的経験は、各人に、何故に人間は倫理法則に従わねばならず、また倫理法則はわれわれに何を要求しているのか、という問いに対する返答を否応なしに求めてくる。そして、最初からすべての宗教的あるいは形而上学的思惟に懐疑の目を以て向かう者であつたとしても、その大多数の者は、上述の問いから逃れることはできない」⁽⁴⁰⁾。それ故、何れにせよ、倫理学は、人間の意識に直接上ってくる事実と経験から出発し、そして、この倫理的経験

事実を包括的に分析することを以てその基礎とすることには、⁽¹¹⁾ 充分な理由もあり、又同時に正当でもあると言わなくてはならない。

われわれは、たった今、メスナー自然法倫理学が経験的・帰納的方法を重視していることを見たわけである。ここで直ちに、これには留保が付されていたことを忘れてはならない。すなわち、経験的・帰納的方法を倫理学の出発点に据えることは、それが直ちに「倫理的・法的基本原理が、人間の傾動的本性[Triebnatur]に規定された価値志向をもった人間の経験から導出される」⁽¹²⁾ という意味での「帰納的倫理学」に陥らざるを得ないことを意味するわけでは決していない。経験あるいは経験事實は、メスナーの自然法論ないし自然法倫理学においては、むしろ形而上学的現実在を認識するための「媒材(媒介物)」であるといつてよからう。媒材なしに、われわれは形而上学的現実在を認識することはできない。この意味で、メスナーは、経験ないし経験事實に徹底的に拘りこれを凝視する。しかしながら、媒材はあくまでも媒材であつて、決して形而上学的現実在ではない。内的経験と外的経験は、計量化する方法によつては、決して完全に汲み尽くされ確定されうるようなものではない。

「人間本性は、外的自然に関与する諸科学がその対象領域を究明し説明するに際して用いる、数・量・重さという単位では説明不可能なのである。人間の本性と倫理の本性とを、行動主義者が意図するように、行動様式に関する統計によつて解明し、説明しようとする試みが失敗せざるを得ないのは、ちょうど美の世界を統計的手法で把握し、解明する試みが失敗せざるを得ないのと一般である」⁽¹³⁾

こういう訳で、自然法論ないし自然法倫理学が真に自己の関心として有する対象は、経験的に把握され得る事実性の次元の存在ではなく、形而上学的ないし存在論的な本質存在である。それ故に、メスナーは、自然法の根拠付けを行う際のかれ自身の方法を「帰納的・存在論的」⁽¹⁴⁾ と自ら形容していたのであつた。そして、この「帰納的・存

在論的」という形容詞によってかれは自己の倫理学の方法を、一方では演繹的傾向の強い「形而上学的・神学的」な方法から、他方では帰納的方法に徹する「経験的・歴史的」な方法から区別する⁽⁴⁶⁾。

さて、倫理学の方法として、先ずは経験から出発する帰納的手続を踏み、しかも経験的・歴史的な帰納主義に陥らないと自認する以上、メスナーの自然法論の方法は、「帰納的・形而上学的」と呼ばれてしかるべきではなからうか。果して、かれ自らがこれを認めているのである。しかし、ここでも注意すべき点がある。メスナーがいう「帰納的形而上学」は、フェヒナーやロッツェ等に依拠して考えられたときのそれではない。いわゆる帰納的形而上学は、『経験可能な領域』に最後まで止まり、個別科学の基礎と基礎的認識を総括し、『学問的世界観』へと到達せんとする⁽⁴⁶⁾。形而上学である。しかし、感覚的経験を超え出ることが実際ないようなものが、一体形而上学であり得るのであるか。それはもはや形而上学ではあるまい。この誤った帰納的形而上学に対して、真正な帰納的形而上学を、メスナーは次のように要約して描いている。それは、「なるほど経験科学（自然科学と文化科学）によって獲得されるすべての確実な認識を経験の基礎に算入するのではあるが、形而上学の本来の使命を果たさねばならない。それは、全存在とその起源の根本現実へ肉薄するという課題である」⁽⁴⁷⁾。

第三章 倫理学における経験科学の意義と限界

現実（実在）と倫理とは、密接な関係に立っている。これは言葉をかえて表現するならば、存在と当為、あるいはスコラの術語では存在と善とは密接な関係に立っているのだ、ということである⁽⁴⁸⁾。倫理の本質は「人間の行為と、

人間本性の身体的および精神的傾動に予め刻印された諸目的との合致⁽⁴⁹⁾に在り、従つて、倫理は、本性に適つたものであり、言い換えると、「個人的存在および社会的存在としての人間の本性の完全な現実性によつて要求されているもの⁽⁵⁰⁾」である。ところで、このように「倫理」と「現実」とが不可分のものであるならば、そして實際そのようではかり得ないのであるから、倫理学ないし自然法論が現実存在を無視することが許されないであろうことは、容易に理解できるのである。

「真正な倫理学は、倫理原理を、實在に押し付けようとはせず、かえつてそれぞれの存在、現實に直面して本質的な存在秩序の諸要求を、自己のものにする。この現實を探究するのは、諸科学の任である」⁽⁵¹⁾（傍点原著者）かくして、われわれは倫理学に対する諸科学、つまり經驗科学の役割の問題に直面することになる。

倫理的なるものの領域においては、二つの認識様態が区別される。それらは、「基本的原理にまで到達する直接的認識による真理認識と認識の確実性」と「基本原理と道徳原理の適用にまで到る推論的理性認識」である。これを簡約して直接知と間接知とよぶこともできるであらう。後者、つまり間接知は、主に応用倫理学に関係してくるのであるが、この応用倫理学（広い意味での社会倫理学）は、社会科学の確証された諸成果を十分に吸収せずして自己の使命を全うすることなど出来るものではない。それ故、「経験諸科学の認識が倫理と倫理学に対してもつ有効範囲（射程）は非常に大きい」⁽⁵⁴⁾。メスナーは、経験科学が倫理並びに倫理学に対して有する射程を次のように説いている。

「経験科学が倫理学に対してもつこの意義は、個々人の肉体的・精神的本性の作用様態については勿論のこと、それを越えて、人間的実存の社会的・文化的・歴史的被制約性を人間に教示するところにも及ぶのである」⁵⁵⁾ われわれは先ず経験諸科学が倫理学に提供してくれる寄与、即ち積極的面について考えてみよう。経験科学は、

周知の通り、この百年間に長足の発展をみている。そして、これには直接的には人間に関わらないものもあれば、又他方で大いに関わるものもある。ここでは、人間存在に深く関係しており、従つてまた、倫理学に対しても重要な意味をもつと思われる二、三の点が採り上げられるに過ぎない。たとえば、生物学においては、特に遺伝に関する分野において、人間の行為に影響を及ぼす遺伝子についての幾多の認識が得られてきた。或いは又、女性の不妊期間についての認識も注目される。⁽⁵⁶⁾ 心理学の分野においても、パーソナリティー心理学や精神分析学の研究によつて、パーソナリティーに及ぼす先天的素質や後天的に獲得され形成されてゆく性格等が、次第に解明されつつある。⁽⁵⁷⁾ 或いは又、社会学の功績も挙げられるであろう。メスナーはここでは言及してはいないが、文化人類学的方面からの寄与もわれわれは想起することができる。⁽⁵⁸⁾ 以上にその若干を述べてきた諸認識が倫理学にもたらす帰結は、次に列挙する判断をくだすに際して役に立つであろう。即ち、(i) 人間の個々の行為を判断するとき。(ii) 人間の行為の動機分析。(iii) 倫理的に問題視されうる行為と疾患による行為とを区別するとき。(iv) 既存の法体系に社会の階級構造、政治支配の形式、文化の発展が倫理的観点からみて如何なる性格を有するかを判断するとき。(v) 問題では、たとえば刑事責任を問う場合に現在では責任原理の立場からいわゆる「責任能力」を有しない者の犯罪行為と責任能力を有する者の通常の犯罪行為とを区別する点で現実的実務の意味を果たしている。⁽⁵⁹⁾

倫理学の本来の任務が、基礎倫理学に立脚しての応用篇にあるのであれば、そして実際そうでなくてはならないであろうが、それは当然に倫理の基礎原理をそれぞれの社会状況に適用する手続を踏む訳である。従つて、ここでは社会状況の可能な限りでの正確な把握が要求されることになる。「倫理的判断は、言うまでもなく、決定的に確証された科学的探究の諸成果にだけ基礎づけられるのであつて、単なる憶見や仮説に基礎づけられうるものではない」⁽⁶⁰⁾ それ故にこそ、現実是如何にあるのか、このことを倫理学は他の経験科学から大いに学ばねばならないの

である。

以上われわれは、経験科学が倫理学に対して寄与しうる広範な問題領域を指摘したのであるが、既に述べたように、学問には自己に相応しい探求の対象がある。「これらの経験科学の守備範囲には明確な境界線が引かれているが、それも当該学問の論理的理由からである。」⁶¹即ち、経験科学の固有の対象故に、経験科学の使命は、「自然や文化における対象領域の諸事実を可能な限り完全に記述し、このような諸事実を因果原理に従って説明したり、或いは歴史的な現象や文化的な諸現象をその一回性や被制約的發展に即して理解し、獲得された諸知識をその内的相互連関の解明を通じて統一的に秩序づけたりする点」⁶²にある。経験科学に内在するこうした方法論的論理が、即ち、経験科学の本質であり限界でもある。換言すると、経験科学は、自己自身の力をもつてしては感覚的経験に属する事実認識を超え出ることは出来ないのである。

「経験科学は、個々のばらばらでは勿論のこと、たとい総合されたとしてもその使用する経験的方法によって得られる単なる事実探究に基づいて、自力で一般的に妥当し、絶対的に義務づける倫理原理を獲得し、また基礎づけることなど、土台無理な話である。同様に、人間の存在意義を論理的に正当な仕方で解決する権限も経験科学にはないのである」⁶³

倫理原理を獲得し、かつ基礎づけ得るのは、そして又人間存在の意味を明らかにし得るのは、形而上学である。

「このことは、．．．それに相応しい認識方法、つまり形而上学の方法を用いてしか明らかにされ得ないところの、存在の根本現実に対する洞察によってのみ可能である」⁶⁴

右にわれわれは、経験科学の固有の領域とその使命について瞥見してきたのであるから、専ら経験科学に立脚しようとする「経験科学的倫理学」が挫折せざるを得ない事情はもはや直ちに理解されと言わねばならない。こ

のような立場の倫理学には三つの形態ないし流派が見られる。第一は、倫理の実証主義（実証主義的倫理学と呼ぶも可）で、これは倫理を単なる倫理意識に基礎づけようとする。次は、科学主義的人間論である。最後の形式は、弁証法的唯物論である。これら総ての流派は、単なる経験に基づいている（という）のであるから、「倫理的ブラグマティズム」を超え出ることは出来ない。⁶⁵

倫理学と隣接諸科学の関係を極めて簡潔適切にテュービンゲンの現実主義的倫理神学者が述べているので、次に引用しておこう。

「倫理神学が、法哲学や政治学や経済学などから、それぞれの学が固有な管轄領域としてその領域に應じて学ぶ態度を保持してこそ始めて、倫理神学はこれらの学問に対して、自分が最後の発言権を有する領域での教示を採択するよう要求することができる。⁶⁶」

右引用文中の「倫理神学」は「倫理学」に、そして「法哲学や政治学や経済学など」は「経験科学」に読み替える必要があるのは、改めて言うまでもない。

第四章 倫理学領域での実験的方法の意義

最後に本稿を締め括るに先立って、経験科学に固有であると考えられる「実験的方法」が倫理学の領域で適用できないものかどうか、という問題を考察しておきたい。

経験科学の誇る厳密性ないし正確さは、実験によってその認識を確定することができるという点に求められる。

言い換えれば、実験によって検証または再吟味をなし得る、という点に求められるであろう。ところで、このような意味での吟味は、倫理の領域では不可能であると思われる。社会生活や倫理の領域では同じ情況は二度と巡って来ることはあり得ず、時時刻刻情況は変化している、と一般に思いなされているからである。この一見あまりにも当然と思われる一般的な予想・期待に反して、メスナーは、倫理学の領域においても、実験的方法が使用される余地があるのだ、と説く。それは、一体どういうことであろうか。勿論その場合にいわれる実験とは、「計画的に準備された実験という自然科学の意味⁽⁶⁷⁾」における実験ではあり得ない。メスナー自身の語るところによると、倫理学にとって可能な実験は、次の三類型、即ち、(i)「思考実験」、(ii)「教育実験」、(iii)「個人生活の実験」並びに「社会生活の実験⁽⁶⁸⁾」である。

先ず「思考実験」について述べよう。これは、その用語自身がその内容を推測させるに充分である。思考実験はメスナーによると、「思考結果の論理的諸帰結が、お互いに吟味され、あるいは確証された諸認識や諸事実によって吟味される⁽⁶⁹⁾」点にその本質が見られる。われわれは既に、あらゆる学問体系の方法論に課せられている要請の一つとして、体系の内部に矛盾がないこと、を指摘しておいた⁽⁷⁰⁾。この「無矛盾性の要求」は、理論的認識に通用するだけでなく、倫理的な、従って又実践的な認識にも妥当する。何となれば、無矛盾律は、たとい厳密な意味での証明がなされ得ないとしても、理性的に思考する限り、そこからあらゆる説明や推論、要するに思考が発すべき原理、換言すれば、これに依らずしては如何なる対話も成り立たなくなってしまう、そういう第一原理だからである⁽⁷¹⁾。それ故に、思考結果を論理的に徹底して得られた帰結が、相互に、または確実な認識や事実と矛盾するようであるならば、明らかにこの思考結果は、支持し得ない訳である。たとえば、「私がある人間に対してする行為を、その者が私に対して行ったと考えてみた場合、この行為に関して私の倫理的意識や感情は私に何というだろうか」とか、

「私にとって正当であると思われる行為を、もしすべての人がとった場合、その結果はどうなるだろうか」⁽⁷²⁾と自問することによって、われわれがここで問題としている思考実験は行われることになる。このような実験は、類比的な意味での実験であり、ある特定の行為がもたらす結果を、仮説的に発明し、その上で、当該行為の価値を評価するのである。

第二の「教育上の実験」とは、「教育の場面で提供される機会に、人間本性の作用様態を観察することによって学ぶことの可能性」⁽⁷³⁾である。ここでメスナーは、社会主義的に運営されている託児所を例に挙げて、この教育上の実験を説明している。要約するとこうである。初めは軽微な窃盗が頻繁に起こったが、子供全員に同額の小銭を分け与えてみると、その後窃盗が行われなくなった。この事例の中に、メスナーは、人間本性の私的所有への欲求とこれに結合した黄金律の認識があることを見るのである。⁽⁷⁴⁾そればかりか、子供たちはお互いの間で自分でお金を出し合って協力し合うことを学んだ、という。

既述の二類型の実験方法が第三の領域においては、更に緩やかな程度でしか語りえないと重々承知しなくてはならないが、次の事実もまたそれなりの意義を有していることを忘れてはならないであろう。即ち、程度の差はあれ、政治的・経済的・社会的諸体制と実験とは結びついているのであって、これらの体制が人間に及ぼす否定的作用を虚心坦懐に見つめることが倫理的認識を得る上で重要な手段となる。⁽⁷⁵⁾つまり、「失敗ないし誤謬から学ぶ」ということが倫理的認識においても問題となり、重要となる。そして、或る倫理原理が有効であるか否かは、「個人生活における実験」と「社会生活における実験」によって判明する。

個人生活における実験は、実は各人によって日々新たに行われている。たとえば、真に倫理法則が知らしめるところに従わずば、人は人間に固有の存在を獲得することは出来ず、人格価値を蔑ろにして架空虚偽の価値の世界

に身を委ね、そこに幸福を見出そうとする訳である。だがしかし、この場合には、たとい一時的に幸福感が得られたとしても、それは直に失われてしまうものだ。それが自己逃避の幸福に過ぎず、自己の存在喪失に他ならないからである。⁽⁷⁶⁾そして、こうした事態を誰よりも真つ先に、少なくとも薄々とはあれ、知っているのは、外でもないその本人である。人間の倫理的存在が実現され、充足を見ることが出来る場合にのみ、人間の幸福への傾動が最もよく実現されるのである。何となれば、自然的倫理法則が人間本性の内奥に印刻されているのであるから。それ故に、真に幸福である、という事態は、文字通り「ある」*Sein, to be*という秩序に関わっているのであって、「もつ」*Haben, to have*という世界と一致する訳ではない。⁽⁷⁷⁾人類の普遍的経験は教示する。「人間は、自己を放棄し低次元の自己を超越することなしには、自己完成を遂げるものではない。」⁽⁷⁸⁾と。

社会生活において行われる実験の場は、世界である。われわれは既に、二つの世界大戦を招来し、経験し、かつ現在においてもなお「国際情勢に緊張、危機、悲劇を露呈する瑕疵ある倫理原理の諸影響」⁽⁷⁹⁾を、つまり、個人主義的・集合主義的原理の諸影響を経験しているのである。自然的倫理法則は、社会生活においても歴史においても容赦なく妥当する。それ故、「社会の運命は、もし社会がこの自然的倫理法則を無視するならば、長い目で見た場合（比較的長い期間が強調されねばならないが）繁栄することはできない、というこの限度において自然的倫理法則に依存している。」⁽⁸⁰⁾

以上、個人生活および社会生活における実験では、メスナー自身の言葉を引用すると、「観察を通しての検証」⁽⁸¹⁾が問題なのであった。われわれは、これを「歴史的経験による検証」と呼び直してもいいかも知れない。

以上の検討を通じて明らかにされたのは、第一に、類比的な意味においては、自然法則と倫理法則においても、確かに実験の意義が認められること、次に、その帰結として、自然法則と倫理法則とは、法則の意味が全く異な

と異議を唱える見解が現実⁽⁸³⁾にそぐうものではないことが、確認されたのである。更に第三に、倫理領域において看破される原理は、説得力をもって直接内心に現れるものであるが、これはわれわれが別稿「自然法論的認識論——メスナー自然法論の一貢献——」において詳細に取り組んだ問題であった。

註

(1)「倫理的真理について——伝統的自然法論の立場から——」、「法哲学と社会哲学」(法哲学年報、有斐閣、一九八六年)、「ヨハネス・メスナーの良心論——良心の構造と機能をめぐって——」、「自然法——反省と展望」(創文社、一九八七年)、「自然法論的認識論——メスナー自然法論の一貢献——」、「法と国家の基礎にあるもの」(創文社、一九八九年)、「メスナー自然法論の思想的境位」、「南山法学」第十六卷第三・四合併号(南山大学法学会、一九九三年)、「自然法と共同善——メスナー自然法論の一側面——」、「多文化時代と法秩序」(法哲学年報、有斐閣、一九九七年)、「ヨハネス・メスナーの生涯と著作」『社会と倫理』第十八号(南山大学社会倫理研究所、二〇〇五年)、「伝統的自然法論の精華——ヨハネス・メスナー晩年の著作を中心に——」『社会と倫理』第二十一号(南山大学社会倫理研究所、二〇〇七年)。

(2)「『百周年回勅』の今日的意義——法哲学的観点から——(1)」「社会倫理研究」第1号、一九九二年、「『百周年回勅』の今日的意義——法哲学的観点から——(2)」「社会倫理研究」第2号、一九九三年、「共同善、社会、国家——トミズムの観点から——」『法政研究』第五十九卷第三・四合併号、一九九三年、「孟子の倫理思想とメスナーの良心論——自然法と実践知に就いての一比較試論——」『自然法と実践知』(創文社、一九九四年)、「カトリック社会理論における自然法の意義」『社会倫理研究』第4号、一九九六年、「伝統的自然法論における自然法と自然法則」「法思想における伝統と現在」(九州大学出版会、一九九八年)、「ロールズ正義論と伝統的自然法論」「社会と倫理」第十九号、二〇〇六年、「共同善と補

完性原理——伝統的自然法論の立場から——』『社会と倫理』第二十号、二〇〇六年。『Für eine Kulturethik im 21.

Jahrhundert』, in : Rudolf Weiler (Hrsg.) *Wirtschaften- ein sittliches Gebot im Verständnis von Johannes Messner.*

Duncker & Humblot, Berlin 2003. „Rechtsethik von Krieg und Frieden im Blick auf Pacem in Terris“, in

ETHICA 2004. Jahrbuch des Instituts für Religion und Frieden, Institut für Religion und Frieden beim

Militärbischofsamt, Wien 2004. „Mensch und Naturrecht in Entwicklung aus Sicht eines japanischen

Naturrechters“, in : Rudolf Weiler (Hrsg.) *Mensch und Naturrecht in Evolution*, Wien 2008, „Philosophische

Überlegungen über die Menschenrechte und Menschenwürde“, in *Zeit-Fragen*, 20. Dezember 2011, 19. Jahrgang,

Nr.51.

(3) 田中朋弘『文脈としての規範倫理学』(ナカニシヤ出版、二〇一二年)は、倫理学を、規範倫理学、応用倫理学、メタ倫理学に大別して、その内の規範倫理学を、義務論、功利主義、徳倫理学、ケアの倫理の四部に別って、考察している。

Annemarie Pieper, Einführung in die Ethik, 4. Aufl., Tübingen-Basel, 2000. Arno Anzenbacher, Was ist Ethik? Eine fundamentalethische Skizze, Düsseldorf, 1987. 同、註(26)を参照。

(4) 水波朗『自然法と洞見知——トマス主義法哲学・国法学遺稿集』(創文社、二〇〇五年)「第四章 現代社会とキリスト教社会論」特に二九八—三二三頁の記述が、この問題について極めて明快な説明を与えている。神学的倫理学(倫理神学) theologia moralisを説くもの代表として、Franz Böckle, Fundamentalmoral, 5. Aufl., München 1991.

(5) Johannes Messner, Kulturethik mit Grundlegung durch Prinzipienethik und Persönlichkeitsethik, Innsbruck-Wien-München 2. Aufl., 1954 S.143.

(6) Johannes Messner, Das Naturrecht. Handbuch der Gesellschaftsethik, Staatsethik und Wirtschaftsethik,

Innsbruck-Wien-München 6. Aufl., 1966 S.417f.

(7) J. Messner, Das Naturrecht, S.417.

(8) J. Messner, Das Naturrecht, S.418. „Die Konflikte zwischen den Wissenschaften beruhen im Grunde immer auf Grenzüberschreitungen von der einen oder von der anderen Seite.“

(9) J. Messner, Das Naturrecht, S.417. 傍点強調は引用者にゆずる。

(10) J. Messner, Das Naturrecht, S.61. 永波朗博士の著述の持続的関心はこの問題に係わっている。それを実定法領域において具体的に適用してみようとする貴重な試みとして、宗岡嗣郎『リーガルマインドの本質と機能』（成文堂、二〇〇〇年）、宗岡嗣郎『犯罪論と法哲学』（成文堂、二〇〇七年）を挙げておく。

(11) J. Messner, Kulturethik, S.230f. „Wissenschaftliche Erkenntnis ist die Einsicht in die Gründe und Zusammenhänge der sich unserem Bewußtsein und unserer Beobachtung bietenden Tatsachen und Vorgänge. Die Einzelwissenschaft, daher auch die Ethik, ist der Inbegriff der Erkenntnisse eines Gegenstandsbereichs als kritisch gesicherte Einheit des Begriffs- und Begründungszusammenhangs dieser Erkenntnisse.“

(12) トマス・アクィナスは、倫理学の考察対象を、「人間である限りにおける人間の行為」、即ち、「人間の行為」と区別される「人間的行為」と見る。これにつき、山田晶「人間の行為と人間的行為」（『社会と倫理』第十七号、二〇〇四年所収）参照。

(13) Vgl. J. Messner, Das Naturrecht, S.67. ヘルムホルツ・ハッティン『図説』Arthur Fridolin Utz, *Approches d'une philosophie morale*, Editions Beauchesne et ses Fils, Paris et Editions Valores, Freiburg/ Suisse 1972, p.17 et suiv.

- (14) Vgl. J. Messner, *Das Naturrecht*, S.66.
- (15) 帰納的方法と演繹的方法については、本稿第二章第一項で論じる。その他、重要な「収斂」Konvergenzについては、J. Messner, *Kulturethik*, Kap. 47を参照。類似した方法としての「誘導的な (abductive) 理由づけ」については、岩崎武雄『現代英米の倫理学』（勁草書房、一九六三年）二五二頁以下。
- (16) J. Messner, *Das Naturrecht*, S.66f.
- (17) 拙稿「ヨハネス・メスナーの良心論——良心の構造と機能をめぐって——」（『自然法——反省と展望』所収）、及び、拙稿「自然法論的認識論——メスナー自然法論の一貢献——」（『法と国家の基礎にあるもの』所収）。
- (18) J. Messner, *Das Naturrecht*, S.37. „Als *Grundfragen*, die alle *Großen Systeme der Ethik beschäftigten*, ergeben sich dann drei: die Frage nach dem Grund, nach dem Wesen und nach dem Kriterium des Sittlichen. Die ersten beiden kann kein System der Ethik übergehen, ohne gegenüber der wesentlichen Anforderung jeder Wissenschaft, nämlich der Ermittlung des Begründungszusammenhangs für die Erfahrungsgegebenheiten ihres Bereiches, zu versagen: dazu kommt für die Ethik als praktischer Wissenschaft die dritte Frage nach den Ordnungsprinzipien des einzel menschlichen und gesellschaftlichen Lebens, für deren Beantwortung sie in einem Kriterium der Sittlichkeit die Richtschnur zu bieten hat.“
- (19) J. Messner, *Das Naturrecht*, S.48.
- (20) J. Messner, *Kulturethik*, S.9.
- (21) J. Messner, *Kulturethik*, S.21.
- (22) J. Messner, *Kulturethik*, S.35f.

- (23) J. Messner, Kulturethik, S.57.
- (24) J. Messner, Das Naturrecht, S.67.
- (25) Vgl. J. Messner, Das Naturrecht, S.368f., 418.
- (26) J. Messner, Das Naturrecht, S.93.
- (27) 譬えば、功利計算とは全く独立した義務意識が存在するのだ、という意識の本質的経験所与。或いはまた、良心の義務付けの絶対性の意識など。
- (28) ここで私は、われわれの自然法倫理学の立場とは異なった立場にありながらも、価値、善、倫理的生き方、といった倫理性の最も基本的問題について全く独自の立場から真摯な思索を展開されていった故岩崎武雄教授の倫理学についての、それも特に分析哲学系の倫理学についての見解を指摘しておきたい。昔万学の女王であった哲学から様々な学問が分化・独立していった。その中でも特筆すべきは近代以降の自然科学である。人はその後、自然科学的認識の客観性ないし学問性を基準にして哲学——岩崎教授によれば「人生観の学としての哲学」——の客観性・学問性を論じ、哲学を非難するようになった。「人生観としての哲学は科学的認識の持ちうるような客観性を持つことができない。したがってそれは非学問的である」(岩崎武雄著作集、第九卷、哲学論文集、一二六頁) という偏見があることを教授は指摘する。ここで更に教授の言葉を引用すると、「しかしとにかくわたしは、われわれが人間として生きてゆく限り必ず人生観としての哲学が必要であり、しかもわれわれが真剣に哲学を追求してゆくならば、どうしても価値判断の客観性を求めてゆかねばならない以上、単に価値判断が科学的判断と異なるという理由で価値判断を『非学問的』であるときめつけるのではなく、何とかして価値判断の客観性を見出し、哲学を学問的ならしめる道を発見するようにつとめるべきであることを強調したいのである。このような努力を少しも行わず価値判断は非学問的であるとしてはじめから捨ててしまうのは、人間としてのま

じめさを欠いたものと言わざるを得ないであろう。」(前掲書、一二八頁) これは明らかに、論理実証主義、情緒主義を念頭においた発言であるが、日常言語学派もやはり、これに含まれている。それは他の多くの箇所(例えば、著作集第三巻、三一八—三一九頁、『倫理学』有斐閣、一九一二五頁など)からみて明らかである。更に、ソクラテスの「無知の智」を常に自ら実践してこられた田中美知太郎教授も、次のような辛辣な発言をしている。「イソップの寓話でしたか、狐が高いところにあるぶどうの実をとろうとして、いろいろやってみるが、どうしてもとれないので、あのかうはすっぱいと言って、立ち去ったというような話があります。(中略) 哲学の問題を、無意味であると宣言するのも、同じような解決法だということになるかも知れません。しかしそれは、けっしてわたしたちを満足させる解決法にはならないでしょう。一種の回避であり、ごまかしだからです。」(田中美知太郎『哲学入門』講談社学術文庫、一五五—一五六頁)

(26) J. Messner, Kulturethik, S.231. „Wie jede Wissenschaft, so muß auch die Ethik bei der Begründung der sittlichen Wahrheit und der sittlichen Ordnung, ausgehend von der Erfahrung, mit Hilfe von begrifflichem und urteilendem Denken ihren Ziele ausstreben. Dabei arbeitet das Denken hauptsächlich mit Folgerungsurteilen. Diese können zweierlei Art sein: induktive, beruhend auf Erkenntnissen, die unmittelbar durch Analyse der Erfahrung gewonnen sind, und deduktive, beruhend auf Begriffen, deren unmittelbare Begründung anderweitig gesucht wird.“

(26) Vgl. J. Messner, Das Naturrecht, S.66.

(27) J. Messner, Das Naturrecht, S.67.

(27) J. Messner, Das Naturrecht, S.68.

(27) Vgl. J. Messner, Ebendort.

(34) メスナーは、『自然法』では次の如くも述べている。「この方法「帰納的方法」は自然法倫理学Naturrechtsethikが既にその名辞を強調しているように、人間の自然本性die Natur des Menschenに關与しているので、尚更特別の仕方で要求されるのである。」(Das Naturrecht, S.67.)

(35) J. Messner, Kulturethik, S.231-232. 経験的・帰納的方法が採用されるべきであることは、新スコラ学内でもますます感じ取られている。たとえば、ドナDonatとM・ヴィトマンがそうした論者である。但しメスナーによると、かれらによつては経験的・帰納的方法の意義および必要性は説かれはしたもの、それに見合うだけの包括的な経験分析は終に立ち入つて遂行されることはなかった。

(36) 「概念的・演繹的方法は、経験事実の分析に精進するというよりは、むしろ形而上学的・宗教的に規定された世界の基本的把握から眺められるような、總体的實在像の中へ経験事実を組み入れていくことに専念する。」(Kulturethik, S.212.) 確かに、中世哲学において経験が無視された訳ではなかった。しかし、全体としてみれば、やはり上述したことがあてはまる、とヴィトマンは言う。

(37) J. Messner, Das Naturrecht, Vorwort zur fünften Auflage, 中の他、たとえば、より最近の別論「進化する自然法」において次のようにこの事情を説明している。「イギリスの法文献を詳細に読んだ後で、私は次のことを確信した。即ち、英語圏ではそのように「形而上学的に」基礎づけられた自然法論は、受け容れられないであろうということ。イギリス人やアメリカ人の思考は、大陸ヨーロッパ的思考よりもむしろ直接的経験に規定されている。従つて、自然法論への接近の可能性を直接経験に見出す、というところが問題に浮上すべき点である。」(Naturrecht in Evolution, in: Internationale Festschrift für Stephan Verosta zum 70. Geburtstag, Berlin 1980, S.467-468.)

(38) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.233.

- (39) Ebenda.
- (40) Ebenda.
- (41) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.234.
- (42) J. Messner, Das Naturrecht, S.320.
- (43) J. Messner, Das Naturrecht, S.67.
- (44) J. Messner, Das Naturrecht, S.345.
- (45) Vgl. J. Messner, Das Naturrecht, S.344.
- (46) J. Messner, Kulturethik, S.231, Anm. 2.
- (47) J. Messner, Kulturethik, S.231.
- (48) これは Bonnum et ens convertuntur というスコラ学の公式に明示されている。この点について、われわれは後に立ち入って検討するところになる。「自然法論的認識論——メスナー自然法論の一貢献——」第二節第一項および第三節第二項参照。
- (49) J. Messner, Das Naturrecht, S.41. 尚「自然法論的認識論——メスナー自然法論の一貢献——」第一節「倫理的真理」を参照。
- (50) J. Messner, Das Naturrecht, S.87.
- (51) J. Messner, Das Naturrecht, S.88. „Aus der dargelegten inneren Beziehung zwischen Wirklichkeit und Sittlichkeit folgt aber auch, daß *echte Ethik nicht der Wirklichkeit sittliche Prinzipien aufzuzwingen sucht*, sondern daß sie *die Forderungen der wesentlichen Seinsordnung angesichts der jeweiligen Seinswirklichkeit*

- erarbeitet*.”更に次の引用文をも参照。「倫理学の課題は、本性の秩序を既存の社会的現実の中で築き上げてゆくところにある。この存在の現実を探究することが、先に述べた経験科学の目的である。従って、所与の状況の下での本性的秩序を尋ねるに際して、倫理学は、経験諸科学に依拠しなければならない。」(Das Naturrecht, S.120)
- (52) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.265 u. Das Naturrecht, S.68. 1611の認識様態の区別は、特に良心の構造分析の上で非常に重要な役割を演ずることになる。
- (53) Vgl. J. Messner, Das Naturrecht, S.89.
- (54) J. Messner, Kulturethik, S.265.
- (55) J. Messner, Kulturethik, S.265.
- (56) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.265-266. 勿論、現在では生物学、医学、とりわけ医療技術の未曾有の発達により新しい困難な問題が次から次へと出来しており、これだけでも詳細で慎重な検討を要すること、言うを待たない。Günther Pöltner, Grundkurs Medizin-Ethik, 2. Aufl., Wien 2006. Ulrich H. J. Körtner, Grundkurs Pflegeethik, Wien 2004. 前者は伝統的自然法論(カトリック倫理学)の立場からの文献、後者はプロテスタント倫理学の文献である。ペルトナーについては、次の二篇の論文の邦訳と書評を参照されたい。ギュンター・ペルトナー著「生命の不可侵性——自己決定の限界——」『社会と倫理』第十七号(二〇〇四年、一七一—一八〇頁)、ギュンター・ペルトナー著「尊厳の尊重と利益の保護」『社会と倫理』第十九号(二〇〇六年、一七五—一九六頁)。「書評 J. Bonelli (Hrsg.), *Der Mensch als Mitte und Maßstab der Medizin*, Wien 1992; J. Bonelli u. E. H. Prat (Hrsg.), *Leben-Sterben-Euthanasie?*, Wien 2000; Günther Pöltner, *Grundkurs Medizin-Ethik*, 2. Aufl., Wien 2006」『熊本法学』第二十七号(二〇〇九年、七一—八二頁)。
- (57) J. Messner, Kulturethik, S.266.

(58) 特に「文化とパーソナリティー」を中心に論ずる文化人類学の一分野である「心理人類学」は倫理学に対してますます意義深くなるものと予想される。祖父江孝男『文化とパーソナリティー』（弘文堂、一九七六年）、参照。

(59) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.266.

(60) J. Messner, Das Naturrecht, S.121.

(61) J. Messner, Kulturethik, S.266.

(62) J. Messner, Kulturethik, ebenda.

(63) J. Messner, Kulturethik, S.267. „Die Erfahrungswissenschaften können weder einzeln noch

zusammengekommen auf Grund der bloßen Tatsachenforschung mit Hilfe der ihnen zur Verfügung stehenden empirischen Methoden von sich aus zur Gewinnung und Begründung allgemeingültiger und unbedingt verpflichtender ethischer Prinzipien gelangen, und zwar ebensowenig wie ihnen eine logisch gerechtfertigte Deutung des Daseinsinnes des Menschen möglich ist.“

(64) Dortselbst.

(65) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.267.

(66) Zitiert aus J. Messner, Das Naturrecht, S.89. 倫理学に独自の境地を切り拓いた岩崎武雄教授も、同趣旨のことを説かれている。教授によれば、われわれは「道徳的原理」の問題と「具体的行為」の問題とを区別すべきであり、従ってまた「原理的な価値判断」と「具体的な価値判断」を区別しなければならない。（岩崎武雄『倫理学』（有斐閣、昭和四六年）第一章2「行為の原理の性格」および三二五頁参照）そして、具体的な価値判断は、必然的にある具体的な状況における判断なのであるから当然にその状況の事実的認識に結びつかねばならない。もとより状況についての事実的な判断だけで

はわれわれは行為することはできない。「いかなる」行為をなすべきか、という根本的な方向・指針が欠けているからである。こういう意味で、岩崎教授は次のように言われる。「われわれが何をしようとも、その行為は道徳的原理にしたがうものでなければならぬ。ただ具体的な行為を決定するためには、道徳的原理のみならずさらに事実・状況についての具体的な知識、広い意味で科学的知識を必要とするのである。道徳的原理についての認識は倫理学的、ないし哲学的認識であるが、われわれが具体的に行為しようとする場合には、この哲学的認識と科学的認識とをあわせ持たねばならないのである。」(『倫理学』三三〇頁) このように、岩崎教授は哲学と科学(或いは哲学的・倫理学的認識と科学的認識)の相補性を子供のしつけや脳出血で倒れた人の看護の仕方という問題などを例にとつてきわめて明確に語っておられる。

(67) J. Messner, Kulturethik, S.234.

(68) J. Messner, Kulturethik, S.235.

(69) J. Messner, Kulturethik, ebenda.

(70) 本稿第一章第二項「倫理学の課題」参照。

(71) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.248. 無矛盾律は通常「矛盾律」と呼ばれているが、なるほどこの原理が矛盾と関係しているとはいえ、直接には矛盾の「無い」ことを要求している原理であるのだから、私はやはり無矛盾律と呼びたい。

村井実『善さの復興』(東洋館出版社、一九九八年)は、「善さ」を人間本性に内在する機構の要求に即した構造的な判断とみて、その要求のひとつとして「無矛盾性」の要求を挙げる(同書、二八六頁以下参照)。因みに、ピオヴェザーナ『スコラ存在論』(五〇頁)は、むしろ「非矛盾律」と呼ぶべきである、という。何れも至当な見解である。

(72) J. Messner, Kulturethik, S.235.

(73) J. Messner, Kulturethik, ebenda.

(74) たとえば、母親が子供に対して次のように忠告する場合、即ち「お前がするように皆がしていたら、この家は一体どうなるのー」と叱るとき、この基底には黄金律が妥当している。

(75) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.236.

(76) J. Messner, Das Naturrecht, S.90.

(77) J. Messner, Das Naturrecht, S.82ff., Kulturethik, S.236, 168f.

(78) Gabriel Marcel, *Être et avoir*, Paris 1935. ガブリエル・マルセル『存在と所有』春秋社。Erich Fromm, *Haben oder Sein*, Stuttgart 1979.

(79) J. Messner, Das Naturrecht, S.90.

(80) J. Messner, Kulturethik, S.236.

(81) J. Messner, Das Naturrecht, S.91.

(82) Vgl. J. Messner, Kulturethik, S.236.

(83) これは現在蔓延している見解である。たとえば、H・ケルゼン（長尾龍一訳）『神と国家』木鐸社、一三七頁以下、碧海純一『法哲学概論』全訂第一版（弘文堂、一九七三年）一三〇頁以下。これについては、次を参照されたい。J. Messner, Das Naturrecht, Kap. 3, 4 u. 5. 拙稿「伝統的自然法論における自然法と自然法則」『法思想における伝統と現在』（九州大学出版会、一九九八年）。